

礎であるのに、そのような特別なはさみを
与えることは過保護であるという批判もあ
る。たしかにそういう面もあるけれども、

「今までははさみが苦手だった子が、これ
を使わせてからはさみが大好きになりました
た」という母親の声、「どっちが使いやす
い？」(従来のもので)ときくと、「こっ

ち」と得意気に新製品をさす幼児の顔に接
すると、あつてもよいものだという自信を
もつ。

そして、母子分離のできにくい幼児に、
手に合ったはさみで自由に切ることができ
るといふ(紙を円滑に切るといふ快感は、
手先の快感だけではなく、大脳の支配する

心の、ある種の自由の獲得であると思われ
るので)その心が、母親からの分離、自立
して自由になるといふ心への橋わたしにな
るのである。

(姫路短期大学)

はさみ 切り紙 紙切り紙

原 口 純 子

一、はさみ

ちかごろの子ども用のはさみは以前のも
のに比べてかなり良質の物が出まわって
いることはよろこばしいことである。

指を通す穴も子ども手の大きさに合っ

ているし、刃のかみ合せもよいのでかなり
不器用な子どもでも、はさみを手に持ち、
紙をあてがえば切ることができる。刃の間
に紙がすべり込んで切ることができないと

いうようなことは少なくなっているように思う。

保育用品は、とかく子ども用ということ
で、安からう悪からうの大人ですら使いに
くいようなものが与えられることが従来見
受けられたように思う。

ここ数年、幼稚園や保育所側の教材や教
具に対する関心が高まり、不器用な子ども
だからこそ良いものを与えようとする姿勢
がうかがわれる。

子どもにとって使いやすく安全なはさみ
が与えられるようになったことはうれし
いことである。

二、切り紙

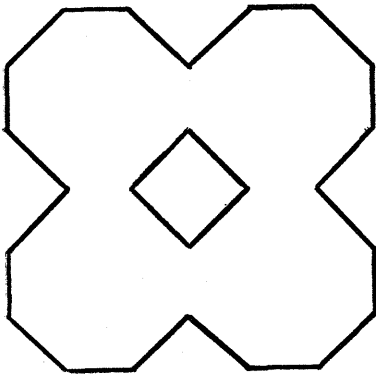
五月の中ごろ二年保育の年少児のクラス
をのぞいてみると、五、六人の子どもがテ
ーブルについている。中央に二、三色の色

紙が二十枚ぐらい置いてある。子どもたち
ははさみを持って切り紙をしたり、おしゃ
べりをして楽しんでいる。

筆者が近づくと「せんせいおはな」と、
大へん得意そうに花型の切り紙をひらひら
させる。「せんせいわたしのあげる」と別
の子も同様の花型の紙をさし出す。

「あらありがとう」などといいながらテー

▲
図 1



ブルを見ると同様の「花」が八枚も九枚も
ある。

作っているところを見ると、正方形の色
紙を四つにたたみ、四分の一の正方形にし
て、四すみをはさみでパンパンパンと
切つて開くと図1のようなものができあが
る。たんだ紙をぱつと開いて「せんせい
おはな」と見せてくれる。同じ色の紙で切
り、また違う色の紙を切り、何枚でも何枚
でも紙があるうちはなくなるまで切りつづ
ける。

保育者としては際限もなく色紙を使って
四つたたみにしては四すみをパンパンと切
つて同じような「花」を作っていられる
と、色紙がとてもしっかりない、という気
持と、何の変化も発展性もみられないこの
活動にイラダチを感じて、何とか模造紙に
はりつけてみるとか、茎や葉をつけるよう
にしむけてみようかと努力したり、あせった
りする。

しかし子どもは、どうもその方にはあまり興味を示さないで、とにかくどんどんいっぱい切る。

くり返しに終って発展性がないとか、紙が無駄だとかいう気持ちをおさえて、どうしてこの活動がそんなに楽しいのかを観察してみると、この活動がこの四歳の年齢の子どもにとって大へん好まれる理由がいくつもあることに気づく。

。切りっぱなしの一息切り

パチンと切る一息切りというのははさみの使い方としては大変幼い段階のものといえよう。はさみの上手、下手は、左手の動かし方とともにはさみの呼息のさせ方にある。

してみるとこの「花」の切り方は入園間もないはさみの下手な子どもにとってかっような活動であり、その上、こんな素朴な

はさみの操作でとても素敵な「花」ができてあがることは大変うれしいことにちがいない。

ちなみに、はさみの練習などといって売っている「切りがみあそび」や「せいさくノート」などというワークノートを見ると、年少の入園間もない子どもにはどれもむずかしい。

はさみの下手な子どもにとって単純でまっすぐな線ならやさしく切れるかというところではない。決った線に従って切るということ自体がむづかしいのである。

一息切りの次にやりやすいのは、たとえ印刷された直線などよりはるかに複雑な線でも自分で描いたかたちを切る、という活動のように思える。

。重ね切り

四つだけたみの色紙の四すみをバンバンと

はさみで切っただけで、開いてみると自分のした作業の四倍の効果があがり、思ってもみなかった型ができあがる。ちよつとはさみの角度を変えたとまたちがった「型」ができる。

こんどはあげたらどんな型になるかしら、というマジックのような期待や、ここをこう切るとこうなるといううたしかな期待がある。

結果としては花のような型ができるので、外から見ると、はてしなく同じような型の花づくりをしているように見えるが、彼らは花をたくさん作っているわけではなく、一回ごとに期待しながら、切ることを体をたのしんでいるのである。

あげたらどんなかしら、と思いつつ、どんどん切っている子どもに、先生が、切り終ったいわばカスのようなものをとりあげて、はっぱをつけましようとか茎がどうのといったところで、興味を示さないのも

無理からぬことである。

三、紙切り紙

色紙を四つたたみした大きさというの
子どもの手に程よい大きさである。また切
る時にひらひらした一枚紙とはちがうちょ
っとした重い切り味がある。

ただ切るのには、色紙はぜいたくでもつ
たいないと思われるかも知れないが、実は
そうではない。かりに広告紙や新聞紙なら
どんなに切ってもイライラせずすむから
というのでそれらを使うことにするとどう
であろうか、仕上りの美しさはまったく違
うのである。切って開いて赤い花やピンク
の花ができあがることは子どもの活動を一
層たのしいものになっているといえる。

考えてみれば、子どもは一つの活動を習
得する過程で、何度も何度も同じことをく

り返すことを思い起さなければならぬ。

砂やブロックで遊ぶとき、何十個同じお
だんごを作ったならばよく、だんごの作
り方に変化や発展が見られなくても先生は
心豊かに活動を受け入れ見守る余裕がある
のに、材料がお金のかかる色紙となると、
とたんに心の余裕を失って、くり返し活
動にイラダチをおぼえる、という傾向はな
いだらうか。

従来さまざまな面から検討されて来た、
保育の形態が実は、教材の管理ということ
と強いかわりを持っていたことがわか
る。

かつて、たとえば砂場や積木やブランコ
のように減りもいたみもしない教材、教具
はいわゆる「自由遊び」の時間におこな
い、折紙や絵を描く活動や楽器などのお金
のかかる材料やいたみのくる教具について
は「一斉活動」として教師がコントロール
して、教材管理をしてきたといえよう。

子どもに活動を自由に選択させ、試行錯
誤やくりかえしの活動を認めるなら、それ
なりの材料の準備と教師側の心がまえがな
ければならない。

たくさんの「花」を切った子どもたちを
数日後に見ると、同じように紙を切る場合
でもはさみを動かさずに、左手に持ってい
る紙をたくみにまわして、うずまぎや、複
雑な型を切つてあそんでいた。

(茨城県・桜村立竹園東幼稚園)

